

安達太良山(雪山登山・山スキー) 山行報告

【山域】福島 安達太良山

【日程】2017年1月7(土)～8日(日)

【天気】7日:曇りのち雪 8日:晴れのち曇り

【メンバー】CL 熊倉 SL 菊池 薄井(記録) 会員外7名

【行程】

7日:千葉 3:40ー安達太良高原スキー場 8:40ーくろがね小屋 11:20

くろがね小屋 12:05ー山頂 14:05ーくろがね小屋 15:30

8日:くろがね小屋 7:50ー山頂 9:20ーくろがね小屋 10:30ースキー場 12:10ー千葉



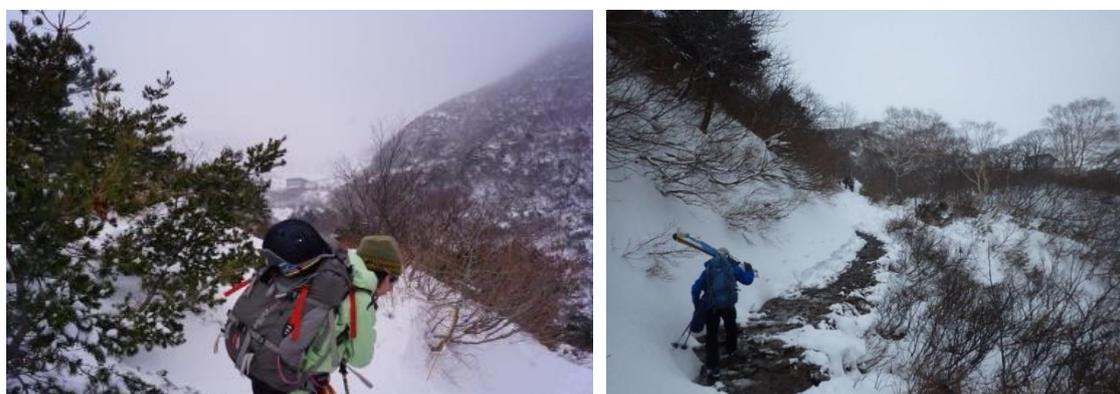
今シーズンも雪が降らない。この連休に安達太良山での冬山合宿を予定していた福島山岳会は秋田へ転進していったので、本当に雪がないのだろう。しかしこの山行はスキーがメインではなく、安達太良ありき、くろがね小屋ありきなのである。というわけで一応スキーは持参するものの期待はせず、初めてのくろがね小屋泊まりを楽しみにすることにした。

安達太良高原スキー場に到着したのが7時40分頃。今回は現地集合のメンバーも含めて車4台、総勢10人の大パーティで、所属や山経験はさまざま、足回りも人それぞれバラエティに富んでいる。

入山届を提出し、スキー隊はツボ足隊と別れて馬車道をたどることにした。一応シール登高はできるが、帰りには相当障害物の心配をしなければならないようだ。途中で行き会う他のパーティにもスキーの人は見当たらない。駐車場では晴天、無風だったが、登るにつれて空は曇り、強風が吹く安達太良らしい天気になってきた。



くろがね小屋の直前の下りでKさんが転倒し、ビンディングが破損した。残念なことに現場対応は不可能で、帰りにはスキーを担いで帰ることになってしまった。



小屋に到着し、先に到着していたツボ足隊が作ってくれた甘酒で一休みする。外は小雪が舞い始め、山頂へ行っても展望は期待できない。しかし予報では今日の方がいいのである。ともかく出かけることにした。

スキー隊は2人。小屋からしばらくは藪が多すぎて、シール登高は不可能である。新雪のこの時期にスキーを担いで登るのは苦行だが、持って行かなければ何のためにスキーで来たのかわからない。



ようやくシール登高ができる状況になってきた。しかし標高 1,590m あたりで登山道に岩がむき出しになってきたのでその場にスキーをデポし、ツボ足で山頂を目指すことにする



先行していたツボ足隊とすれ違い、ひと登りで山頂直下に到着した。視界はまったくなく、山頂はあきらめてすぐに下山する。



デポ地点まで下ってスキーを履くが、周囲のガスが濃く視界はほとんどない。登山道に立てられたポールを見失わない範囲に、滑りやすい斜面探してそろそろと下りていった。ぎりぎりまで滑るとスキーを再び担いで小屋まで下りた。転倒の際に、スキーを止めるゴムバンドを1本



紛失したようだった。

小屋ではツボ足隊が夕食の準備を始めていた。時間がずれたせいで貸切で入浴でき、



しかも食堂に行けばすでに鍋の準備が整っており、ありがたい限り。たくさんいただいて眠くなり、再度入浴して布団に入ったのは消灯より早い8時前。まったく山には日頃の寝不足を解消に来ているようなものだ。

翌朝5時過ぎに目覚めて外に出てみると、なんと満天の星。さて、どう

しよう。天候が悪ければそのまま下る予定だったが、この天気だと今日も登るだろう。滑れる斜面が大してないのはわかっている。であれば、スキーブーツでツボ足隊に混じるのも辛いが、大展望を見に行く方がいいのではないか。そんなわけで、一人ツボ足隊に寝返ることにした。

昨夜の鍋の残りとラーメンの朝食後、再度登る準備をする。菊池山スキー隊リーダーは当然スキーを担いで上がるので、別行動になった。



峰の辻から、今日は展望のよい稜線コースを歩くことにした。登っていくと左手にいかにもスキー向きの、美しい斜面が見えてきた。



これはスキーだねえと思うが、こんな狭い斜面をうまく滑れるはずがない。それよりも展望が見たい。ポリシーなし根性なしのなんちゃってスキーヤーなのだった。

稜線から山頂へは、文句なしの大展望が広がっていた。風もない。眼下の爆裂火口とその向こうの磐梯山、純白の飯豊、ゆったりと広がる吾妻連峰、蔵王、会津や那須の山々、振り向けば二本松市街と福島市街が見下ろせる。おそらく安達太良にしては珍しい、全方向うっとりするような眺めだった。



山頂で記念撮影をし、今度は直登コースを下りる。今日の天気は午後から下り坂の予報で、本当にラッキーなタイミングだった。



峰の辻へ向かう途中、1本のシュプールが見えた。ん？と見回すと、矢筈森直下に動くスキーヤーらしき人影が見えた。たぶん菊池リーダーしかいないけどどうだろう、テレマークならそうだよ、と話していると、果たしてそのスキーヤーはテレマークターンで滑り降りて来た。ただ一人2本のシュプールを刻み、ご満悦の様子である。

小屋で落ち合うことにしてツボ足隊は先に下山した。小屋で行動食をとり、満面の笑みで下山してきた菊池リーダーとともに、スキーでまともに滑れる地点まで再び担いで下りる。下りメインになったところでスキー滑走に切り替えるが、地雷を踏むたびにスキーが痛いと呼ぶ、のではなくこれは心の叫びかも。ツボ足隊と大して変わらない時間にスキー場に戻ったとき、山はもう高曇りになっていた。

スキー場に隣接した「奥岳の湯」でさっぱりし、岳温泉のおしゃれなレストラン「空の庭」で遅い昼食をとって解散となった。 (以上、薄井 記)

山スキー部門(菊池 記)



1/7~1/8 に安達太良山に行ってきた。年末年始の期間にくろがね小屋泊で訪れたのは今回で3回目である。

1回目は2014年の1月2日~3日、この時は大雪の年で、山頂付近がガスで視界不良で登頂できなかったが振り子沢の滑走は快適でくろがね小屋の下まで滑走可能、スキー場までの下山でも馬車道脇の林間パウダーランもある程度できた。2回目の2015年12月29日~30日は寡雪の年、くろがね小屋の上部の偵察で山スキーは難しいと判断し、好天の翌日スキーを持たずに稜線から山頂の到達、強風であったが、グレイトビューを堪能できたが上部には滑走可能な斜面がかなりあり、山スキーヤーとしては後悔の念に苛まれた。今回は前回に比べ積雪は少なめ、スキー場で35cm、くろがね小屋付近で40~50cmほどか吹き溜まりは80cmほどあるようだ。馬車道は前回よりやや少なく、石がでていいる所が少しあるが、シール登行は快適であった。

7日の天気図では好天が期待できたが、くろがね小屋に着くころには上部はやや強風でガスにより視界不良、翌日の天気は午後から崩れる予報であったため、休憩後行けるところまで頑張ろうと、アイゼンを履きスキーを担いで出発した。スキー組は二人、他はツボ足隊である。この辺はブッシュと岩で滑走は無理である。峰の辻に近づくとシール登行可能となり、振り子沢上部も滑走可能な状態であることを偵察しながら進んだが石が出ている峰の辻を通過少し下って直接山頂に向かう登山道ルート(数十mごとにポールが立てられている)を進むが岩だらけとなった。前回のこのルートは積雪で覆われており、スキーを持参しなかったことが悔やまれたが、今回はこれ以上シール登高は無理である。視界不良の中、滑走できた標高差は約120m、ポールの可視範囲で滑りやすい斜面を物色、数ターンずつ停止し、ポールを確認、相棒を誘導しながら下った。パックされ雪面は手強くターンは容易ではない。前回くろがね小屋上部ではほとんど滑走できなかったのに比べそれでも標高差120ほど滑走できたので、よしとしなければと自らを慰めた。

くろがね小屋は満員、何回でも訪れたい温泉山小屋、鍋とお酒で宴会は盛り上がったが、外の風はかなり強い。さあ、明日の天気はどうなることやら。朝から下山か、はたまた、午前中だけでも晴れるか。神のみぞ知っている。まあまあの酔い加減で消灯前に早々と布団にもぐり込んだ。トイレに2回ほど起きたが良眠、ヘッドランプ装着で朝風呂を楽しみ、夜明けになると無風快晴であった。続々と山頂に向けスタートした。

相棒は前日の手強い雪のため、稜線経由のグレートビューをゲットするため、スキーは持たずに小生のみが好天の下少しでも快適に滑れる斜面があるのではとただ一人スキーを担いでの出発となった。峰の辻には早くも多くの登山者、山頂下の斜面には真白く広がった美味しそうな斜面があるではないか。あそこにシュプールを刻んでやるぞと一気にテンションがアップした。



前日のスキーをデポしたあたりからブッシュの岩の徐々に急になる斜面をアイゼンツボ足でハイクアップ、かなり深く潜るところもあるが、それほど苦勞せずエントリーポイントに到達した。出来るだけ上部から滑走すべく登りあげ、この斜面にエントリーした。日ほど前までに降雪があったようだがパックされた雪質はかなり手強さそう。滑りはじめの斜度は25

度強か、慎重にアルペンターンでバランスを崩さないようにターンした。視界良好、フラットな斜面、前日に比べ極楽である。初停止してマイシュプールをスマホで撮影した。一本目の貸し切り状態のマイシュプールです。



安達太良山スキーは4回目ですがこの斜面にシュプールが刻めたのは初めてです。この積雪不足にスキーを担ぎ上げた甲斐がありました。斜度が緩んでくるとテレターンに移行しましたが、横ずれしにくいパック雪のため、しっかり板を踏みつけながらの慎重滑走です。二本目はシール登行で稜線ルートに向かい、矢筈森の下から滑りました。ここも一本目と同様パック雪、それでもこの時期、この積雪不足でこれだけの滑走できれば大満足でした。



くろがね小屋からの下山は勢至平まではツボ足歩行、そこから馬車道を滑走、概ね順調に滑走できるが、下部に行くほど石の地雷が隠れているところが多くなり神経を使った。滑走面にはかなりの損傷が残った。